

いれずみ物語

— 21 —

小野 友道

唐獅子牡丹

唐獅子牡丹と聞けば、50歳を過ぎた男なら、まず映画「昭和残侠伝 唐獅子牡丹」(昭和41年1月公開の東映映画で、佐伯 清監督)の高倉 健演じる花田秀次郎の背中そのものを思い出すに違いない。ポスターに、懐かしくも“総天然色”とあった頃である。そして健さんの巻き舌で歌う極めつけの「唐獅子牡丹」がある。

♪義理と人情を 秤にかけりや
義理が重たい 男の世界
幼なじみの 観音様にや
俺の心は お見通し
背中で吠えてる 唐獅子牡丹

映画が終わると、多くの若者たちは、なんだか強くなったみたいに外股で肩を怒らして、その背中に唐獅子牡丹を背負って映画館から出てきたものだ。

*

唐獅子は文字通り中国から来た。「史書によると、ヨーロッパ文化が中国に伝わってから、獅子ははじめて貢ぎ物として中国に入れられたという。しかし、漢の時代に獅子そのものを見て、その音を聞いた人は極めてすくなかったので、その形を象った芸術品は、本もののライオンと程遠いイメージがあった。猛々しい獅子は獣中の王と言われ、そのイメージは人々の社会生活、物質生活、精神生活、藝術生活と切っても切れない存在となっている」と、姚 希純の『北京的獅子』

の冒頭に、日本語でも、そう書いてある。

峨眉山、天台山と並んで仏教三大霊場の一つ五台山を浄土とする文殊菩薩は獅子に乗って行幸したとされ、そこには牡丹が咲き乱れている。

この唐獅子は平安時代、仏教渡来時に一緒に日本に来たらしい。梵漢字典である『翻訳名義集』(1143年)に「譬如大獅子吼小獅子聞悉皆勇健、一切禽獸遠避竄。」と、その威厳がうかがわれる。能の『石橋』で、文殊菩薩のお使いの獅子が牡丹咲き乱れる中を走る。獅子は牡丹が好きで、牡丹を食べて生きるともいわれている。この百獣の王と花の王の組み合わせは、御守護としての意義があり、例えば江戸時代の七代宋春の火事装束に見事な獅子と牡丹の文様が見られる。この唐獅子牡丹の組み合わせ文様はすでに12、3世紀頃から定着していたようである。

*

熊本の秋は藤崎宮の例大祭とともにやって来る。随兵行列と飾り馬の勢子の「ドーカイ・ドーカイ」の掛け声が勇壮である。この行列に獅子と牡丹が加わるが、祭りはまず、雌雄の獅子が藤崎宮で御幣を賜り、天拝と呼ばれる舞を奉納する。さらに、大きな牡丹の飾りの周りを雌雄の獅子が愛の戯れを踊る「牡丹舞」がある。五穀豊穰を願う踊りである。左程に獅子は神の使いとして神聖であり、大祭の呼び物「随兵行列」のその先頭を担っている。現在、新町獅子

保存会がこれを取り仕切っているが、厳しい練習で選ばれた者が獅子頭を担当する。すでに400年の伝統があり、「永青文庫」（細川藩に伝わる美術品・古文書を収集している財団）に「藤崎宮例大祭絵巻」があるが、まさに現在の祭りでの獅子と牡丹そのままに描かれている。

*

さらに、唐獅子牡丹といえ、『南総里見八犬伝』を語らずにはおられない。

南総里見八犬伝は、ご存じ伏姫が犬の八房の背に乗って山に隠れる。そのうち伏姫が懐胎する。父親の里見義実と、本来ならば伏姫の婿となっていたはずの金碗大輔が救助に向かう。大輔の鉄砲で八房が倒れ、伏姫も意識なく、義実が近くに落ちていた数珠を伏姫の首にかけてやると、姫は意識を取り戻す。姫は侘びを言いながらも、八房の子ではないと、

「宿れる嵐をひらかずは、おのが惑も、人々の、疑も又いつか解くべき、これ見給へ、と臂ちかなる、護身刀を引抜きて、腹へぐさと突立て、眞一字に搔切り給へば、あやしむべし瘡口より、一朵の白氣閃き出で、襟に掛けさせ給ひたる、彼水晶の珠数をつゝみて、虚空に升ると見えし、珠数は忽地弗と斷離れて、その一百は連ねしまゝに、地上へ憂りと落ちとどまり、空に遺れる八の珠は、粲然として光明をはなち、飛遶り入峯れて、赫突たる光景は、流るゝ星に異ならず、主従は今さらに、姫の自殺を禁めあへず、われにもあらで蒼天を、うち仰ぎつゝ、目も黑白に、あれよ、と見る程に、颯と音し来る山おろしの、風のまに、八の靈光は、八方に散失せて、跡は東の山の端に、夕月のみぞさし昇る、當是數年の後、八犬士出現して」

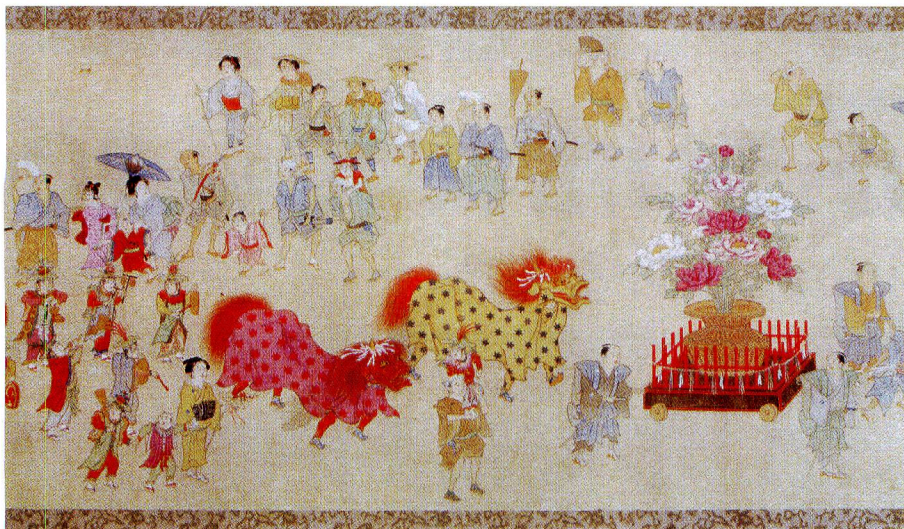
とある。その八犬士はそれぞれに一文字が浮く玉と、身体のどこかに痣が出現する。例えば犬塚信乃には「まず諸膚を推ぬぎつゝ、と見ればわが左の腕に、大やかなる痣いで来て、形状牡丹の花に似たり」とある。また、犬川莊佐は右胛下などと、他の犬士にも、それぞれどこかに同じ大きさの黒い牡丹の痣がある。

この『南総里見八犬伝』と唐獅子の関係については、高田 衛の『八犬伝の世界 伝奇ロマンの復権』に見事に詳しい。

高田はまず、前編第七回の挿絵「金碗八郎切

腹の図」に注目した。馬琴自身が「文外の図、画中の文」と述べているが、高田はこの事は本小説の挿絵全般に言えるとし、それぞれの画を読み取る重要性を指摘している。そして、それに従って先の図を読んだ。「図は切腹する八郎を中心に、義実、杉倉（里見老臣）、百姓一作、その背に負われた八郎遺子、つまり後の大輔を配して、左上にこれを心地よげに見下す玉梓悪霊を描いている。…ところが、この絵には、奇妙なことにほんらい目立ってはならない襖に、人物たちの誰にもまして、克明ていねいに唐獅子牡丹を描いている」と指摘した。さらに、「あらためて仔細に見ていると、玉梓悪霊を包む点描で描かれた妖気が、一方では八郎が刀を突っこんだ血みどろの傷口に達しているのは当然として、一方では何とこの唐獅子牡丹をも雲霧状に覆わんとしているのである。まるで唐獅子が玉梓悪霊を後見しているかのごとく、また玉梓悪霊が唐獅子の靈力につく、憑むかのごとくではないか。無心に見るかぎり、唐獅子に特定の意味はない。しかし、〈画中の文〉を読む立場からすれば、事情は別である。ここで妖犬八房の構想根拠の一つが、『太平記』の猛犬く犬獅子〉であったことが思い出される」と高田は読み取る。さらに「八房は、玉梓悪霊が狸に憑き、その狸によって育てられた犬」であり、それはまた、支那の故事にある獅子の天敵狸と符合する。そして「馬琴は見返し絵に〈犬〉の聖なるもののシンボルとして〈狛犬〉を描かせている」ことは、「社寺神域の守護神である〈狛犬〉とは、実に唐獅子の日本化した最たるイメージではなかったか」と喝破した。そして高田の話は、八字文殊菩薩に及ぶ。この文殊は、既述したように唐獅子に騎乗している。文観の筆になる「八字文殊菩薩像」に、獅子の背中に座した菩薩の「その周囲に描かれている九人の幼童子に注意したい。あたかも慈母を慕う幼な児のように、唐獅子騎乗の文殊菩薩のまわりに散って、讃嘆と慕情をこめて仰ぎ見上げている童子たちは、文殊八大童子と文殊侍者の善財童子である。これこそ、聖なる父母聖像としての伏姫・八房の合体像と、八犬士の関係をあらかず原其的な聖イメージではないだろうか」と述べている。

牡丹との関係では、高田もやはり先に述べた、



「藤崎宮例大祭絵巻」獅子と牡丹（部分）（熊本大学附属図書館所蔵）

能『石橋』に触れている。この石橋の話は、当時の江戸で知らぬ者のない神話であったという。

「仏跡を訪ね歩いた寂昭法師（ワキ）は、中国の清涼山の麓へと辿り着いた。まさに仙境である。更に、ここから山の中へは細く長い石橋がかかっており、その先は文殊菩薩の浄土であるという。法師は意を決し橋を渡ろうとするが、そこに現われた樵（シテ）は、尋常な修行では渡る事は無理だから止めておくように諭し、暫く橋のたもとで待つがよいと言い残して消える」

後段は「舞台正面に一畳台と牡丹が据えられ、後段が始まる。『乱序』という緊迫感溢れる特殊な囃子を打ち破るように獅子（後シテ）が踊り出、法師の目の前で舞台狭しと勇壮な舞を披露するのだ。これこそ文殊菩薩の靈験である」

*

ここで、筆者は馬琴の「本伝は 始めより用意をさへ加減あり、水滸百八の百を除きて八犬士あり」との言に注目したい。かの葛飾北斎が1808年から4年かけて『新編水滸画伝』を描いた。その際、馬琴の知恵を借りた。馬琴は北斎描く豪華絢爛たるいれずみの迫力を見ているのである。その後間もない1814年、八犬伝を書き始めた馬琴は八犬士の印に牡丹を配したが、本当は水滸伝にちなんで牡丹のいれずみを考えたのではないか。しかし、この勧善懲悪物語に、当時御法度のいれずみはできなかった。そこで馬琴は消える痣を考え出した。京都

帝大の解剖学教授足立文太郎は「馬琴は大学者にして又自然研究家たり、該斑は想像せしものにあらず事実を探りて小説に編成したるなり」とし、かの牡丹の黒い痣を、馬琴が蒙古斑を意識したと考えた。大団円で消えた玉梓の悪霊の印の牡丹であるが、蒙古斑もご存じのように自然に消える痣である。古来、蒙古斑が神仏の責罰などで出現すると考えられた時期もあったのである。

余談ながら、2006年米国ボストン美術館から浮世絵などの所蔵品が里帰りした。その肉筆浮世絵コレクションの中に、葛飾北斎の「唐獅子」があった。それは中央の円の中に、ものすごい形相の唐獅子が爪を立て、周囲の四角の画面一杯に紅、白、黄色、はたまた青い牡丹の花が咲き乱れていた。

本稿は高田 衛の『八犬伝の世界』に拠るところが多いことを記し、感謝する。また、「藤崎宮例大祭絵巻」についてご教授下さった、永青文庫川口恭子氏（熊本大学客員教授）、新町獅子保存会（熊本）の皆様にお礼申し上げます。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

足立文太郎：『増補日本人体質之研究』、荻原星文館、1944。
 荒俣 宏（文）、大村次郷（写真）：『獅子—王権と魔除けのシンボル』、集英社、2000。
 小野友道：『人の魂は皮膚にあるのか』、主婦の友社、2002。
 高田 衛：『八犬伝の世界』、中央公論社、1980。
 幸田露伴編者：『南総里見八犬伝』、博文館、1923。
 姚 希純：『北京の獅子』、北京出版社出版集団、北京美術摄影出版社、2006。